

素になれる場所 — 幸せを求めて —

布 辰巳

聞き手・権左彩夏 西東夏海
(石川県立田鶴浜高等学校1年)

生まれたときから後継ぎ

布辰巳、昭和16年4月23日生まれ。家族構成はわたし(73)と家内(67)と息子(41)の3人です。

子供の時は、勉強ちゅうより外で遊んどった。石蹴り、かくれんぼ、おにごっこ、それから小学校の時は相撲、夏になれば水泳、夏休みになったら、毎日みたいにふんどしで海へ行っとった。近かったから。

子供の時から、ここ継ぐちゅう意識が強かったから特別夢はなかった。中学校入ったときにもう、「親から継ぐんやぞ！」って言われとって、高校入って卒業したら確実にもう後継ぎと決まっとった。だから手伝いも含めて高校1年ぐらの時からやっとなるからもう57年。手伝いは簡単なことからしとったね。

丈夫な七尾仏壇

先ず、仏壇の木材は能登の地材を使っているっていうのが前提です。今は部分によっては他のものも使うけど。仏壇の後ろの板は、他の産地は1枚なんですけど、七尾仏壇は2枚の二重鏡板。2枚っていうのは構造的に後ろ全体を支える板が1枚あって、その前に1枚の板をすこし湾曲させて膨らんだ様な形にして合わせてある。中央・右・左とそれぞれ3枚を後ろ板に並べて重ねて配置するわけ。一般的には1枚の板を後ろの仕事、前から見える部分は前の仕事をするちゅう1枚の板で作ってある。現物見れば分かりやすいけど、ややこして分からんね。七尾の仏壇はそこがダブルの2枚になっとるわけ。だから構造的に丈夫なんです。

木材の部材が直角に交わる部分が貫通して組み合わせられている、これがほぞ組みです。他の産地もある程度なっとるけど、七尾仏壇はよりがっちりなっとるんです。これが強度を高める構造になっとるわけ。七尾仏壇の台は、他の産地と

骨組みから違って棧などの部材もちょっと厚い。いろんな細かいところでも、他の産地からみるとやや厚くて頑丈やなあ。全部強度のためです。

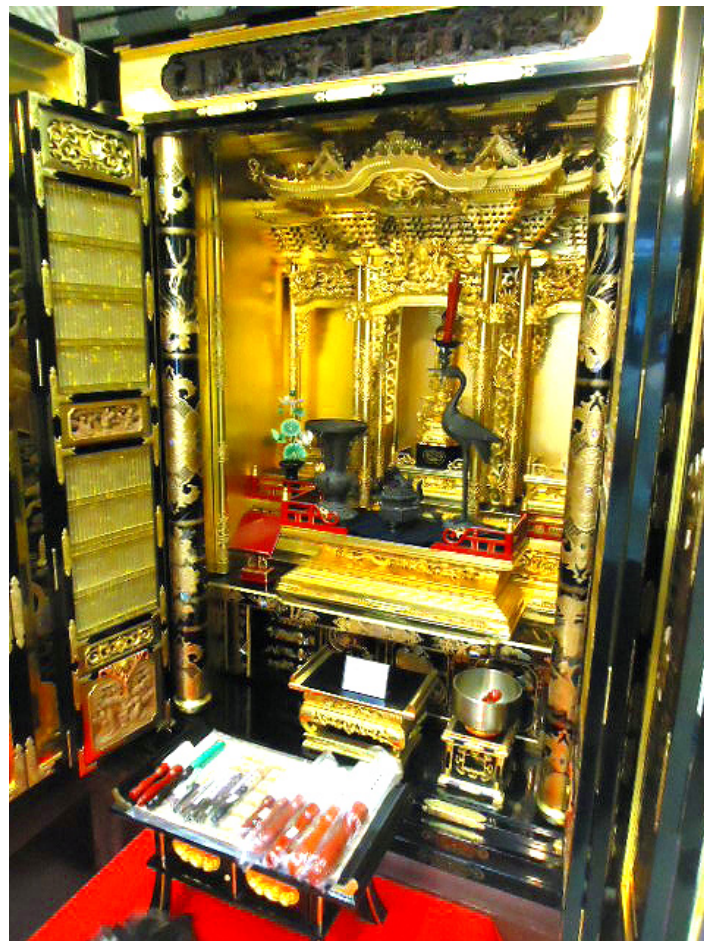
気持ちの拠り所

自分にとっては、毎日拝んだらから、やっぱりそうやなあ気持ちの拠り所というか、必要で大切やと思う。やっぱりこの世に生まれたことに対して感謝、「ありがとう」って。自分はこうして一人で生きとらんじゃなくて、皆さんのおかげで生きとられる。みなさんのお陰さんでこうしておられるという思いやね。生まれるっていうのはものすごいことで、ほんとに希なことや。そういうことと思うと、自分の命は大切にしていかなんってことやな。そんで、素直に考えると神さん、仏さんの命が宿ってわたしやあなた方が生まれた。人が何か無限の力というか、何かに対し頼りたい拝みたい気持ち

ちになった時、仏さんを作ったり、絵にかいたり、彫刻で作ったり、色々な祈りなり感謝なり思い続ける、思いを託す対象としての偶像を造って、そこに神がいるって信じて自分の時間になるとそこでお祈りする。何も無くても拜むことはできるけど、やっぱり見える形があると小さな子どもにでも、「感謝しようね」「ご挨拶しようね」って言いやすいし気持ちをあらわしやすいと思う。そんな意味でも仏壇は偶像を安置する場所としての一つの形じゃないかなとわたしは思う。

無くなりつつある当たり前

この辺の田舎の家は昔から家に仏壇があるのが当たり前やった。特にこの北陸ってところは真宗大国って言われて、浄土真宗の教えが広く伝わっている。だからお寺との関わりも深くて多くの家に仏壇がある。おじいちゃんおばあちゃんと一緒に、朝晩お参りをするという時代があって、



(左上) 能登のヒバとアテで作る仏壇の後ろ側。強固にほぞ組が作られている。

(左下) 正面から見た二重鏡板。中央・右・左とそれぞれ緩やかに湾曲している。別々に作られ、配置されている。

(右上・右) 丈夫でありながら、繊細な彫刻や豪華な金箔が施されている。(200代の仏壇)



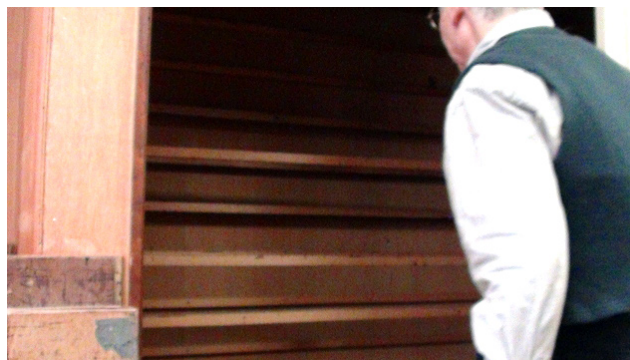
生活の中では当たり前やった。今は、その当たり前がなくなってきた。だからどうってということもないかもしれないけど。生活に不便はないし。だけど、何か足りなくなってきたんじゃないかなって気はするんです。家の中に仏壇があるとそういう気持ち、感謝する気持ちを伝えていきやすい。どんな人でも必ず死はあるし。歳を重ねて衰えていくと人によって信仰っていうものが出てくるんじゃないかな。若い時はなんていっても怪我してでもすぐ治るみたいもんで、でも歳いくと何もかも衰えていく、治り方も遅いし、そうすると神仏さんに助けちゅうもんをどっかこっかで求めるんじゃないかなと思う。

七尾仏壇製作の特徴

七尾の仏壇は基本的に5人の職人さんが必要なんです。まず木地師や。一度木地の状態でここ塗師屋に来る。そして、彫刻の木取りを彫刻屋さんへ出す。それから金具師さんに金具の寸法を取ってもらう。幅とか長さの寸法や。塗師屋が、仏壇ばらして（解体）下地をする。下地とは砥の粉と膠を合わせたもの。平たい板状の部分は堅地と言って、地の粉や漆を使うけどね。膠って、ようはゼラチン。膠は日本画書くときにも使ったり、食用のゼラチンだったり。その膠を混ぜたもので下地を付けて行く。部品によっては2、3回付けて、水を付けて、砥石で研いて平らにして柿渋を塗る。柿渋は青い柿を腐らせて作ったもの。上澄みは強烈な匂いがするけど良質の天然防腐剤で、大工さんが家を建てる時に柱に漆を塗る下地によく柿渋を防腐剤として使ったんや。赤っぽい色をした柱は弁柄塗るんやけど、その場合も防腐剤として柿渋を使うんや。天然材料ですごく重宝してたけど、そういう天然材料もだんだん少なくなってきた。需要が少なくなってきたんやね。下地付けの後には中塗り工程を場合によっては数回重ねる。それから上塗り。漆は湿気乾燥といって、温度と湿度が高いとよく乾き、低いと乾かない。塗ったものを乾かす所をフロと言ってね、そのフロの湿度調整がその日の外気によって違うのでうまくいかんで、若い時やよう失敗したけどね。そして金箔押し。その先に、絵を付ける部分は塗りあがったら、蒔絵師さんに出す。それぞれの職人さんから上がって来たものを全て集めて組み上げて塗師屋が完成させる。だからとても時間（日数）がかかるんや。

完成までの期間

今、木地から1本の仏壇を1人でやるとしたら半年ぐらいかな。大きさにもよるけど。とにかく木地が出来てこない仕事が進まないから。木地だけで普通は1ヶ月。その木地が出来てからあとは同時進行でやるんや。蒔絵師さんは塗り上



(上) 砥の粉と膠を合わせた下地。この後に漆を塗り、金箔を施す。
(中) 漆
(下) 漆を温度と湿度で乾かすフロ

がらないと描けないので、絵を付ける部分の塗りを先に仕上げ。金具屋さんと彫刻屋さんは、木地ができた時点で同時進行する。最速で完成するまでにやっぱり半年ほどかな。一番時間のかかる仕事は屋根の部分や。職人さんでいったら、木地屋さんと塗師屋が時間かかる。

しかし、一般的な工程よりももっと丈夫にするとか華麗にするとか、条件が難しくなるとそれだけまた時間もかかる。1つの仏壇を仕上げるのには半年間毎日その仏壇のことに携わっている訳ではなくて、たとえば乾かす時間とか寝かす時間ってゆうのも含めてや。だから毎日どっかは触ってるけど、一日中その1本に携わっているという訳ではない。いくつかの別の仕事を間に入れながら進めていく、ということやな。

仏壇製作の昔と今

一番需要のあった時は、昭和40年から50年代かな。3

日に1度ぐらいの頻度で納品しとった期間もあった。今は昔と下地のやり方も原材料も違うし、中塗りは1度だったのを2度するし、金箔も最上級のものを使ってるけど、そのころはもう少し純度の低いものを使とった。正面から見える所だけ金箔使って、見えない所は、真鍮しんちゆうの箔を使うということもやとった。そんな期間が何年もあったと思う。真鍮の箔っていうのは、何年かすると変色してきて、10年、20年ぐらいすると金箔との境目がはっきり線になって見えてくる。時代が進むにつれて仏壇の素材も変化してきたからね。

200代ぐらいの大きい仏壇では、金箔は3寸6分(約11cm)角のものを代替2500枚くらい使うし、金箔押すまでの下地から上塗りまでの工程は、あの時代と比べると今はより手を掛けてて完成度が高いと思う。値段の違いもあるけどね。

仏壇製作に関わる職人

前にも言ったように、七尾仏壇製作には基本的に5人の職人が必要なんです。木地師・金具師・蒔絵師・彫刻師、そしてわれわれ塗師。七尾には「七尾仏壇協同組合」ちゅう組織があって、職人たちはその組合員になとる。例えば、うちがお客さんから仏壇の製作を頼まれた場合、先ず木地の製作を木地屋(師)に発注する。組合にはそれぞれの職人さんが、今は少なくなっただけど、2人か3ずつおって、金具屋(師)はもう1人しかおらんけどね。それぞれの塗師屋(仏壇屋)は、だいたい木地は誰それ、金具は誰、彫刻は誰っていう風に、仕事を頼む職人が自然に決まるとる。だから金具屋のように1人しか職人がおらんと、仕事が混んで納期が遅れたりして困ることもあったりするんや。そうやって基本5人で1本が仕上がる。うちは塗師屋やから、みなさん(職人さん達)にお願いしたものを上げてきたらまとめて組み立てて、お客さんにお渡しするっていうのが仕事。

仏壇の大きさ

仏壇にはいろいろの大きさがあって、本尊軸のサイズを基本に「代」という単位で表されています。50代とか、70代とか。例えば70代の仏壇なら、70代の御軸が3枚並んで掛かる幅の仏壇、ということになるんです。大きいものでは最近では造ることは少なくなって来たけど、田舎の大きな家にある一般的なサイズの「200代」とかね。7、8サイズくらいはあるかね。ちなみに200代という御軸の幅は1尺(仕立てによって多少差がある)くらいで、七尾仏壇の200代の総幅は4尺1寸前後。(仏壇は今も尺・寸で表す)

今でも中島町とか、輪島の三井あたりでは300代の仏壇がかなり残っていますよ。今まで何本も塗り替えの仕事をさ

せてもらいました。塗り替えの作業工程も、解体洗いのあとは新品と同じ工程を踏みます。蒔絵などは良い状態であればそのまま残すし、各部材が傷んどれば、それぞれの職人さんに補習修理してもらいます。そうして塗り替えたものは新品にも増していい味の深みが出て、私は好きやね。

仏壇生産の昔と今

一番忙しかった昭和40年、50年代には世の中の多くのものがそうやったように、我々の業界にも大手のメーカーが進出してきて、その産地に合わせて見た目は同じようだけど、漆は使わない、吹きつけ等の機械工作業の安い商品が出回り出したんです。その頃は、ひと月に産地物(自店で製作)2割、既製品(メーカー物)8割くらいの納品やったと思う。作とる暇がないくらいやから。昔は注文が無くても作とった。弟子達もおったし、職人さんも大勢おったから。今じゃ考えられんことや。

能登沖地震以降からは、大きく情勢が変わった気がする。地震で傷んだ手持ちの仏壇を修理塗り替えする人ももちろん多いけど、大きいものを小さくするちゅう人が多くなったね。新しく大きいものはあまり出ない。特に家を建て替える人は生活の変化で、構造上小さい仏壇になってきたね。だから大きいものからだんだんちっちゃくなって、仏壇の需要もだんだん少なくなっている。今は、ちっちゃなものでもそんなに出ない。注文製作も以前よりは減っているし、見込み生産はほとんどしない。今は、新しいものより修理塗り替えの仕事の方が多だね。仏壇の修理は大きさにもよるけど、ゆっくり3ヶ月かかる。今は仏壇だけでってゆうのは、営業としては難しいから。

昔、わたしが若い頃は休みの日は月2日しか無かったけど、今は若い衆(従業員)の働く日が月20日ほどやからね。わたしは毎日少しでも仕事場に入ってますよ。仕事無い方が辛いわ。

塗師屋

仕事は塗師屋なんで塗箔(漆を塗って金箔を押す仕事)するものはどんなものでも仕事としている。小さくても大きくても。例えば、小さい物はお椀とかお膳など、大きい物ではお神輿とか。この辺りの夏祭りの奉灯とか、お寺の本堂の中とか。本堂は仏壇を大きくしたような感じになとる。ほんで柱もあって、ちようどお寺をちっちゃくして箱にしたものが仏壇やね。だからお寺のご本尊が居るところとか、内陣を直接漆塗って金箔押ししたり、屋根の下の複雑な部分とか。宮殿くうてんって言うんやけどね。今はそっちのほうの割合がかなり占めとると思う。



(上) 現在作業中の神輿のたる木 1本づつ丁寧に下地が塗られている。
(下) 下地の上に漆が塗られる。

人としての大事な想い

仏壇離れってというか、人間の考え方や住まい方などが変わってきて、生活に仏壇の必要性を感じていないのだと思う。昔のように、じいちゃんばあちゃんと一緒に仏壇にお参りをするつちゅう風景はほとんど見られない。強制はできないけど、やっぱり一家の中にそういう大きな何かと自分が向き合う場所があるってゆうことはとても大事だと思う。仏教に限らずや。人間生きてることがどんなに希なことか、どんなに尊厳のあることかっていうことをやっぱりきちんと認識しないと、うまく言えんけど、今の世の中に起こっていることの意味が分からんのかな。そういう命に対する想ってゆうのが違ってくるんじゃないかなあっていう気はしています。だから、「こういうものがあるから」とかだけではないと思うけど、家族がお盆に先祖のお墓参りに行くとか、正月にはみんな揃っておせち食べて、神社に行くとか、そういうことも含めて、人として生きるときに大事な部分ではないかとわたしは思うんです。そんな中の1つの形としてのお手伝いができるんじゃないかなあって思っています。でもこれはやっぱりみんなそれぞれ思いがあって、昔の子供達と今は違うからね、わからんけど。ただ「神仏がおるか、おらんか」じゃなくて、「おる」って思ってる人が幸せやわ。

わたしはそう思っとる。

七尾仏壇のこれから

今、七尾仏壇の職人さんは70人もおらん。組合員数が32人や。もちろん木地屋さんも金具屋さんも蒔絵師さんも彫刻屋さんも塗師屋さんも入れてや。この七尾の仏壇に関わった仕事をしている人の総数やから。塗師屋だけやったらそんなにおらんし。やめていったり、亡くなったり。後継ぎがないからね。もう少し需要があれば仕事に携わる人も出てくるだろうけど。一度途絶えると伝えていくの難しいし、なんかさびしいね。

[取材日：2014年8月8日・10月22日]

PROFILE

布 辰巳 ぬの たつみ

昭和16年4月23日・73歳
七尾仏壇 漆塗部門伝統工芸士
有限会社ぬのや仏壇店 代表取締役

昭和35年より仏壇作りに携わり、平成7年、平成11年の全国伝統的工芸仏壇仏具会長賞をはじめ、数々の受賞をしている。また、平成23年には伝統的工芸品産業功労者等経済産業大臣表彰も受賞している。仏壇作り一筋で七尾仏壇の伝統の継承に尽力している。

